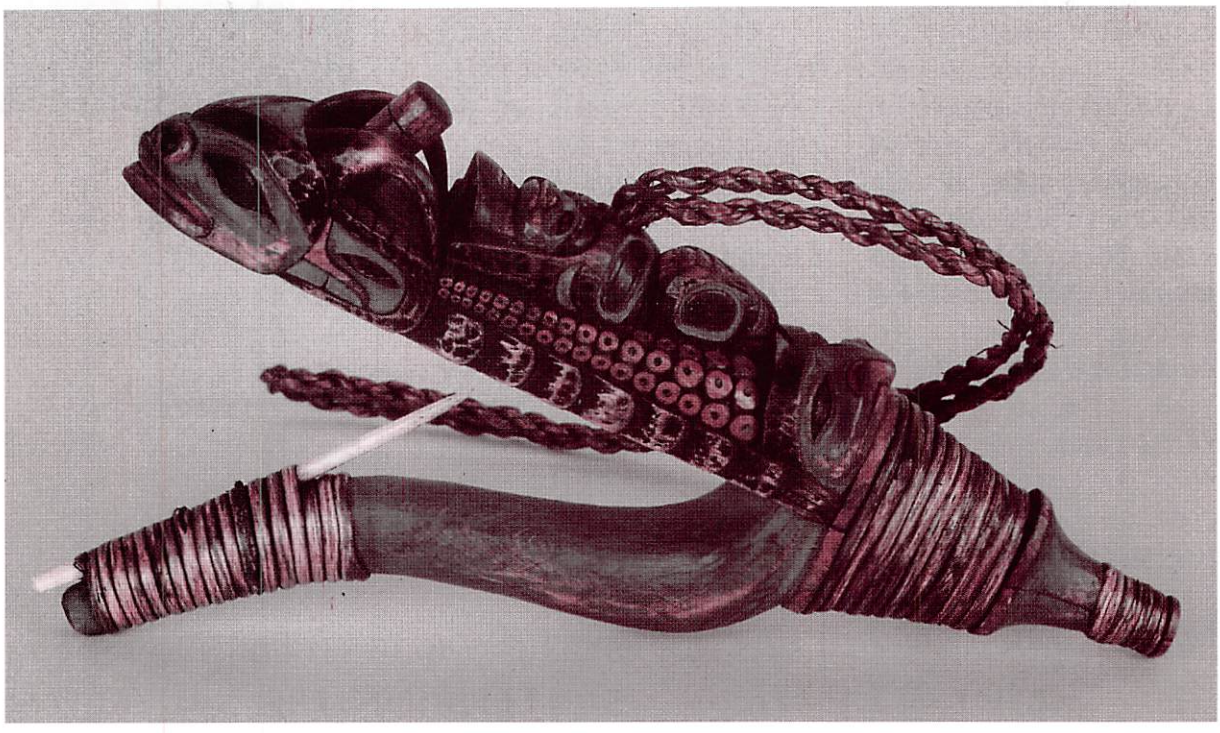
ISSN 0917-4729

北方民族博物館だより No.50

目次 CONTENTS

2 ロビー展 ミュージアムコレクション「モンゴルの生活と馬具」
ふわふわフェルト展
講習会 フェルトの工作教室
3 資料紹介 平成14年度収集資料について
4 国際博物館の日記念講座
北方の歌・踊り・遊び
コンサート 草原のメロディー-喉歌体験教室と馬頭琴コンサート-
5 コンサート アイヌの調べ～OKI（オキ）・トンコリコンサート
発掘調査のお知らせ
6 INFORMATION



HA283オヒョウ用釣り針（27.1cm） 北西海岸インディアン カナダ

オヒョウは、雌で体長2.7m、体重250kg、雄で1.4m、180kgにもなるカレイ科最大の魚で、日本の東北地方から環オホーツク海地域、アメリカ北部の北太平洋地域やベーリング海に生息する。タラ、カレイ、貝、カニ、タコなどを食べる。オヒョウは比較的深海を住処（すみか）とするため、これを捕獲するには工夫が必要である。

今号の表紙は北西海岸インディアンのオヒョウ用釣り針である。オヒョウ用釣り針は２型式に分けられる。表紙のものは2つの木材を上下に組み合わせ、材の一方に骨製や鉄製の「かえり」がしばりつけられたV字型の釣り針である。主に北西海岸北部のトリンギット、ツィムシャン、ハイダによって使用された。南部のヌートカやマカーなどでは堅いモミ属の材を蒸して曲げたU字型の釣り針が使用された。長い釣り糸に、餌（えさ）を付けた釣り針と石の錘（おもり）を結びつけて海底にしずめ、釣り針を海中に浮かび上がらせる。

オヒョウ漁は、大きくて力が強い獲物を相手にした漁なので、漁がうまくいくようにと補助霊の力を頼りにする。そのためV字型の一方の部材には、しばしば象徴的な動物や人物像が彫刻される。写真の資料にはタコが彫られている。

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

ロビー展

ミュージアムコレクション「モンゴルの生活と馬具」

4/26(土)～5/18(日)　当館特別展示室

当館では、開館以来継続して北方民族資料の収集をおこなっていますが、展示空間の制限もあり、展示や普及事業で使われていない資料もあります。

「ミュージアムコレクション」は、より多くの収蔵資料を公開しようという企画です。今回は当館が収集したモンゴルの民族資料から、馬具を中心とした現在の生活用具を展示しました。特別展示室の半分以下の空間に収まる小規模な展示でしたが、モンゴルの大草原に暮らす人びととウマとの関わりの一端を紹介しました。

モンゴル国は、ユーラシア大陸中東部に位置する日本の約4倍の面積を持つ内陸国です。シベリアに隣接し、自然環境や人びとの文化の面でも北方に連なる地域であるといえます。近年、都市に住む人びとが急激に増えていますが、草原では今も家畜を飼い、季節ごとに移動する生活を送っています。

以下で本展示の概要を紹介します。

＊　＊　＊

モンゴルでは「五畜」（5種類の家畜）、つまりヒツジ、ヤギ、ウシ（ヤクも含む）、ラクダ、そしてウマが遊牧の対象とされ、その肉、乳、毛や皮が衣食住に利用されてきました。

なかでもウマは、おもに騎乗して移動する手段として重要な役割を果たしてきました。

モンゴル人にとってウマは単なる家畜ではなく、誇りであり、地位や富の象徴でもあります。モンゴルには「モンゴル人はウマのタテガミの上で生まれ、駿馬の背の上で死ぬ（芒 1997より）」という諺があるほど、ウマは人びとの生活と深く結びついた存在です。

モンゴルの人とウマの結びつきを示す資料として、頭絡（ウマの頭に着け、ハミや手綱を結びつける装具）、鞍、鞭、振分鞄など、ウマに乗る際の道具類、馬捕り竿（ウマを捕らえるための道具）、汗取り用ヘラ、焼印、鈴など、ウマを管理するための多様な道具類を展示しました。

またウマとともに暮らす牧民の日常生活に欠かせないのが、磚茶（茶葉を蒸してレンガ様に堅く圧搾したもの）を煮出して家畜の乳や塩を加えた「乳茶」です。食事やちょっとした休憩時に一日何度も乳茶が飲まれ、他の家を訪問した際にも必ずといってよいほど乳茶が出されます。馬具以外の展示資料として、こうしたお茶に関わる道具類ー茶椀、茶臼、すりこぎ、ヤカン、杓子、磚茶の実物などーのほか、衣類やブーツなども展示しました。

これらの実物資料以外に、モンゴルで撮影した写真をパネルにして展示し、現地の雰囲気が伝わるように心がけました。

＊　＊　＊

本展示をおこなうにあたり、写真や情報の提供などに関して次の方々にお世話になりました。記してお礼申しあげます。

石井智美氏（光塩学園女子短期大学）
西村幹也氏
（モンゴル情報紙「しゃがぁ」）

（学芸課　中田　篤）

ロビー展

ふわふわフェルト展

5/23(金)～6/15(日)当館特別展示室

講習会

フェルトの工作教室

5/24(土)10:00-11:30 講師　工芸友の会会員

ロビーの有効活用と地域住民に博物館活動に参加して欲しいとの思いから、今年度より市民にロビーを利用していただく企画を始めました。その第一弾として、工芸友の会（網走市：大友光枝代表）にフェルト製の小物を出品していただき、あわせて子ども向けの講習会を行ないました。

フェルトは動物の毛、特に羊の毛でつくられた布状の素材です。毛は、水や弱アルカリ性溶液（せっけん液など）を含ませたり、圧力、振動などを加えると、繊維が互いにからみ合い離れなくなります。フェルトづくりはこの性質を利用し、牧畜民が開発した技術です。古いものでは、ロシアのアルタイ山中の遺跡から、紀元前のものが出土しています。寒い地域では、防寒のために衣類や住居の材料としてフェルトが用いられてきました。断熱・防音・振動防止などの特長をもつフェルトは、現在でも生活用品や車両・機械の部品等に利用されています。

本展では、既製のフェルトから作った小物ではなく、羊の毛からつくりあげた帽子・バッグやフェルト画などの作品62点を、同会会員4名から出品していただきました。北欧で手工芸として盛んだったフェルトづくりは、最近日本でも人気が出てきました。

5月24日に開催した工作教室では、小石を羊毛でくるみ、石けん水をつけ押し固めてフェルト化させ、それに目鼻をつけたり尾をつけたりして動物の形のペーパーウェイトを作りました。

当館では、今後も北方民族と関りのある市民の文化活動を紹介していきたいと考えています。　（学芸課　齋藤　玲子）

平成14年度収集資料について

平成14年度は、実物資料231件、映像資料６件を購入し、８件の資料寄贈を受けました。寄贈資料については、その都度本紙面に掲載してきましたので、本稿では割愛させていただきます。

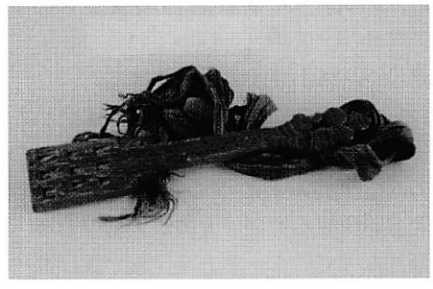
民族／地域別の実物資料件数とおもな内訳は次のとおりです。

コリヤーク：衣類・袋物など53件
エベン、イテリメン：白樺樹皮製容器など３件
（以上、ロシア／カムチャツカ州）
サハ：馬乳酒用杯など12件（ロシア／サハ共和国）
アルタイ：衣類など7件（ロシア／アルタイ共和国）
ハルハ：牧畜用具など111件
バヤド：投げ縄１件
ダルハド：馬具など11件
ツァータン：クロテン用罠1件
（以上、モンゴル）
ブリヤート：衣類など９件（中国／内蒙古自治区）
北海道アイヌ：木椀、刀など10件（日本／北海道）
その他：絵葉書、スノーシューなど13件

昨年度は、平成13年度に引き続いてロシア／カムチャツカ半島、そしてモンゴルを重点地域とし、民族資料の収集活動をおこないました。

カムチャツカ半島については、コリヤークの民族資料を中心に収集しました。シロザケの皮、ガンの足の皮などを素材とした小物入れ、ハマニンニクやイラクサで編んだ籠、毛皮やビーズを使ったネックレスなど、多くは現代の工芸品であり、実用品というよりは装飾品・土産品といった意味合いが強いものと思われます。しかし、なかには皮切り用板や漿果摘み用の籠など、50年以上前に製作された実用品も含まれています。

モンゴルでは、モンゴル国人口の約80％を占めるハルハの民族資料を中心に、鞍や鞭といった馬具類、餌箱や家畜係留用紐など家畜飼育にもちいる道具類、乳の加工・保存に用いる道具類、衣類、調理用具、装飾品や儀礼用具など、現在も日常的に使用されている道具類を多数収集しました。また、五徳や石臼、銅製ティーポット、嗅ぎタバコ入れ、火打石付きナイフなど、現在ではあまり使用されなくなっている資料も集めることができました。



H14.75　乳搾げ用具（ツァツァル）ハルハ／モンゴル

北部のフブスグル県で収集したダルハドの資料には、ハルハとは異なる特徴を持った乗馬用の鞍などがあり、モンゴル国内に共存する多様な文化を感じさせてくれます。また、この地域は首都ウランバートルから遠く離れており、近代的な工業製品が少ないためか、すでに都市周辺では見られなくなった古い形式の資料が比較的多く残っている傾向にあるようです。

さらに、これまで当館ではあまり収集をおこなってこなかった地域として、モンゴルと同様に牧畜文化圏に含まれる中国／内蒙古自治区、ロシア／サハ共和国やアルタイ共和国の民族資料を収集することができました。内蒙古自治区の資料は、ブリヤートの衣類が中心で、当館で収蔵するために新たに製作されたものです。サハ資料としては、杯や柄杓など馬乳酒に関連するもの、「口かせ」（仔ウシが母ウシの乳を飲むのを妨げるための装具）など、牧畜に関連するものを収集することができました。アルタイの資料には、羊毛皮製の冬の外套、皮製の水筒など、モンゴルと共通するものも含まれています。

これらのほか、日本領時代のサハリンで観光土産として製作された「樺太土人風俗」、「樺太十六景」などの絵葉書計90枚とパンフレット・小冊子３部を収集しました。このなかにはサハリン先住民の写真も含まれていますが、樺太の写真の一部は1930-40年代に半澤中によって撮影されたものと思われます。

また、寺田弘氏より寄託を受けていた北海道アイヌの資料の一部10点を購入しました。

映像資料としては、1931年に二風谷で行われた熊送り儀礼の記録「イヨマンデ　アイヌの熊送り儀礼」のオリジナル版のほか、British Film Institute所蔵のアイヌの映像２本、ロシア先住民の日常生活や儀礼を紹介したダートマス大学極地研究センター制作の映像2本を購入しました。

また、当館の資料収集評価委員会では、以前から研究者が研究資料として撮影した映像を収集してはどうかという意見が示されていました。今回はそうした映像として、シャマンの儀礼の様子を撮影した「モンゴルのブリヤートシャマン」を収集しました。

さらに、普及用として、カナダ・ハドソン湾東岸のイヌイトの生活を紹介したロバート・J. フラハティ監督の古典的名作、「極北のナヌーク」（日本語字幕付き、DVD版）を購入しました。

今年度は、引き続きロシア／カムチャツカ州の民族資料を中心に、常設展示の入れ替えや強化のために必要な資料、次年度特別展示に必要な北方地域の牧畜文化に関連する資料、講座や講習会などの教育普及事業で説明や比較のために使用する資料などを収集していくことにしています。

また、これらのほかに、現地調査をおこなっている研究者の情報などにもとづき、随時北方諸地域の民族資料を収集します。

さらに、平成14年度に引き続き、研究者が撮影した映像や写真などの資料も積極的に収集してゆきたいと考えています。

（学芸課　中田　篤）

国際博物館の日記念講座

北方の歌・踊り・遊び　講　師　谷本　一之（当館館長）

5/18（日）13:30 -15:00 当館講堂

北方の芸能に関する講座を当館谷本館長を講師に開催しました。以下に概要を報告します。

北方の芸能調査

これまで、30年以上にわたり北方地域の民族音楽の調査をしてきた。最初に取り組んだことはアイヌの人びとの芸能であったが、アイヌの芸能のあり方を突き詰めるためには、北方、すなわちシベリアを調べに行かなければならないと感じるようになった。しかし、当時、シベリアは閉ざされた世界で調査などとうてい不可能な地域だった。そのため、シベリア調査のきっかけをつかもうと、観光旅行でシベリアの南端にあたるハバロフスクに旅行して“シベリアの臭い”を嗅いだり、シベリアに最も近いアラスカのセントローレンス島でシベリア・ユピックの人びとの芸能調査を行ったりしていた。

その後、アラスカからカナダ、グリーンランドへとイヌイトの芸能調査を進め、文化は多様でさまざまな要素が入り交じっていることを強く意識するようになった。東の端にあたるグリーンランド東部のアマサリクで調査を行っているときにソ連のペレストロイカがはじまり、ようやくシベリアへ行くことができるようになった。

北方の音楽の特徴

北方諸民族の音楽で太鼓が大変重要な要素となっている。北方諸民族の間に歌われる曲種の中心は、太鼓を叩（たた）きながら歌う「太鼓踊り歌」といってよいであろう。この太鼓を叩きながら歌うということはシャマニズム信仰と深くかかわっている。しかし、この点だけをみてもシベリアと北アメリカとではいくつかの違いがみられる。その一つは太鼓の形状である。シベリアの太鼓ではその内側にあるひもをつかんで太鼓を保持するのに対し、チュコト半島のチュクチのものも含め、アラスカ、カナダ、グリーンランドの太鼓では外側に保持するための取っ手がつけられる。また、シベリアでは太鼓を叩くのはもっぱらシャマンの役割であるが、北米から東側では一般の人びとも太鼓を叩いて歌う。そのほか、各人が自分でつくったり両親からもらったりした「自分の歌」をもつことや、動物のうなり声を真似る擬声、動物の動きを真似る仕草も特徴の一つである。

（学芸課長　渡部　裕）

コンサート 草原のメロディー - 喉歌（のどうた）体験教室と馬頭琴コンサート -

出　演　嵯峨　治彦氏（馬頭琴・喉歌奏者）

5/25（日）14:00 - 15:30 当館野外ステージ

野外ステージを利用した企画第1弾として、馬頭琴・喉歌（のどうた）奏者の嵯峨治彦氏をお招きし、コンサートと喉歌体験教室を実施しました。

嵯峨氏は、北海道を拠点に活躍する馬頭琴・喉歌奏者です。学生時代に馬頭琴と出会い、1997年に馬頭琴を入手してから、ビデオやモンゴル人演奏家が来日した機会に習うなどしながら演奏を覚えたそうです。

現在、日本各地で精力的にコンサートをおこなうとともに、さまざまなジャンルの音楽家と共演しています。等々力政彦氏とともに結成した日本初の喉歌デュオ「タルバガン」は、1998年ロシア連邦トゥバ共和国で開催された第３回国際ホーメイ・コンテスト外国人部門で優勝、総合成績でも地元の名手に次ぐ準優勝という好成績を収めています。近年は、和太鼓やアフリカンドラム、津軽三味線など、さまざまなジャンルのアーティストたちとの共演もおこなっています。また、これまで松任谷由実、あがた森魚、EPOほか多くのアーティストのアルバムに喉歌と馬頭琴で参加してきました。

コンサート当日は天候に恵まれ、暑いくらいの晴天になりました。当初、野外ステージの利用を考えた企画だったのですが、嵯峨氏の提案により、音の響きが一番いい場所、そしてモンゴルの草原の雰囲気が出る場所ということで、急遽ステージ前の芝生でコンサートをおこなうことになりました。

嵯峨氏が馬頭琴を手に芝生上の椅子に座ると、参加者は思い思いにリラックスして芝生に腰を下ろし、和気あいあいとした雰囲気のなかでコンサートが始まりました。

馬頭琴の音はマイクを通さず、あえて生の音だけにしたのですが、演奏者との距離が近かったのと音の響きがよかったため、本来の音色を直接聞いていただくことができました。曲に合わせ、広々とした草原の景観、馬の蹄の音やいななきを表現するように艶（つや）やかに、ときに軽快に奏（かな）でられる馬頭琴の音色に、参加者の皆さんも熱心に聞き入っている様子でした。

また、だみ声と澄んだ声を同時に出す喉歌は、その場に一種独特の雰囲気を醸しだしていました。喉歌体験のコーナーでは、嵯峨氏の丁寧な説明・実演にも関わらず、ほとんどの参加者が高音を出すことができずに苦労していました。

からっと晴れた北海道らしい晴天の下、緑の芝生はまさにモンゴルの草原を彷彿（ほうふつ）とさせるステージになりました。

（学芸課　中田　篤）

コンサート

アイヌの調べ～OKI（オキ）・トンコリコンサート

出　演　OKI（オキ）氏（トンコリ奏者）7/6(日)14:00-15:30 当館野外ステージ

野外ステージを利用した企画の第２弾として、トンコリ（五弦琴）奏者のＯＫＩ（オキ）氏をお招きし、コンサートとトンコリ講習会を実施しました。

ＯＫＩ氏は神奈川県の出身で、1987年に渡米し、ニューヨークのフィルムプロダクションでヴィジュアル・アーティストとして勤務しました。1992年に帰国し、その後旅先で偶然譲り受けたサハリンアイヌの伝統的弦楽器「トンコリ」に魅了され、以後楽器の演奏や製作法を独学で習得されました。これまでに3枚のCDを発表していますが、トンコリやアイヌ音楽の伝統に現代的な感覚を織り込んだ斬新なサウンド作りは、国内のみならず海外でも注目されています。

また、これまでにナバホのフルート奏者やオーストラリアのアボリジニ・バンド、チュクチのミュージシャンなど先住民のアーティストとの共演にも積極的に取り組んでいます。

現在はソロ活動に加え、トンコリ、歌や踊りのパフォーマンスにギターなどの楽器を交えたバンド「OKI& the Far East Band」のリーダーとしてもご活躍中です。

７月午後の強い日差しのなか、コンサートが始まりました。ＯＫＩ氏はステージ中央で椅子に腰掛け、マイクを装着したトンコリを左肩にもたせかけて演奏を始めました。

サハリンアイヌの伝統的な曲とメロディーを現代的にアレンジした曲、ＯＫＩ氏のオリジナル曲、トンコリ演奏のみの曲とアイヌ語や日本語のボーカル・語りが入る曲など、さまざまな曲が約1時間に渡って演奏されました。

ＯＫＩ氏は、日差しが直射していたため眩（まぶ）しそうな様子でしたが、曲の雰囲気や調子に応じて数本のトンコリを持ち替え、乾燥した屋外に合わせて弦の張りを微調整しながら澄んだ音色を響かせていました。

演奏曲のなかには北海道に侵入した者たちに対する辛辣（しんらつ）なメッセージを内包したものなども含まれていましたが、トンコリの清澄な音とＯＫＩ氏の優しい歌声で会場は穏やかな空気に包まれていました。

コンサート後、当館所蔵のトンコリを利用して、簡単な演奏方法の講習会をおこないました。コンサート参加者から希望者を募り、野外ステージ前の芝生に車座になってＯＫＩ氏の指導を受けました。トンコリの数に限りがあったため、講習を受けることができたのは10名足らずでしたが、お子さんから壮年の男性まで、さまざまな方がトンコリの持ち方、弦の弾き方から簡単なメロディーの演奏まで、プロの手ほどきを受けました。

ほとんどの参加者は初めての楽器に苦労している様子でしたが、ＯＫＩ氏の懇切丁寧なアドバイスに従って熱心に弦を弾いていました。　（学芸課　中田　篤）

発掘調査のお知らせ

平成９年以降、当館では発掘調査を一時休止していましたが、今年度より再開します。発掘は美岬４遺跡（平成７年当館発掘）、能取西岸遺跡（平成８年当館発掘）が位置する能取半島で行い、オホーツク文化、擦文（さつもん）文化の関係についてさらに調べてみる予定です。

オホーツク文化とは、北海道ではおおよそ５世紀から10世紀の間、主にオホーツク海沿岸に住居を構え、海の幸を多く利用してきた人たちの文化です。擦文（さつもん）文化とは、おおよそ７世紀から12・13世紀にかけて、本州の強い影響を受け、主に北海道全域を中心に展開した文化で、後のアイヌ文化の源流とされています。「擦文」とは土器の表面に刻まれた文様が木の篦（へら）などで「擦（す）った」ように見えるところからきています。

能取半島には、当館や網走市立郷土博物館の分布調査によりオホーツク文化期と擦文文化期の遺跡が８ヶ所立地するとされています。そのうち４遺跡が調査され、２遺跡がオホーツク文化期の遺跡、２遺跡が擦文文化期の遺跡であることが当館や北海道開拓記念館の発掘調査によって明らかとなっています。

オホーツク文化期の遺跡からは刻文期（土器の表面に木の篦や爪で描いた短い刻み目の文様を持つ土器を使用していた頃で、７世紀頃に相当）や貼付文期（土器の表面に細長い紐状の粘土を貼り付けた文様を持つ土器を使用していた頃で、９・10世紀頃に相当）の竪穴住居址、遺物が確認されています。しかし、現時点ではこれらの時期に対応する擦文文化の遺跡はこの地域では確認されていません。したがって、両文化は、能取半島において時間差をもって存在していたと推定されています。

ところで、知床半島周辺では、オホーツク文化貼付文期以降、時期的に対応するとされる擦文文化と混在していく状況が認められますが、地理的に隣接する網走周辺ではそのような状況は、今のところ明瞭ではありません。

今回の調査ではオホーツク文化、擦文文化に相当すると思われる遺跡が集中している能取半島に焦点をあて、オホーツク文化期、擦文文化期の能取半島での状況をより詳しく調べることを目的としています。

＊　＊　＊

発掘期間は8/19(火)から9/5(金)を予定しています(期間中の休みは月曜日のみ)。また、発掘期間中、発掘の楽しさを知ってもらうために、発掘体験や現地説明会を予定しております。ふるってご参加ください。

詳しくは当館までお問い合わせください。
Tel. 0152-45-3888
ホームページ
http://www.ohotuku26.or.jp/hoppohm/

◆第18回特別展案内　先住民社会と水産資源-サケ・海獣・ナマコー

北方における海獣狩猟やサケ漁を中心に、先住民社会における水産資源の捕獲や利用について紹介します。交易品として利用された北方地域の水産資源は主に海獣類の毛皮ですが、東南アジアなど南方地域では古くから干しナマコなどの海産物が交易品として流通してきました。

本展示では厳選した国立民族学博物館の民族資料などにより、先住民社会における水産資源の獲得、利用とその歴史を紹介します。

期　　間　平成15年7月19日（土）ー9月28日（日）
休 館 日　9/1（月）・8（月）・16（火）・22（月）
特別展観覧料　一般300円（240円）／高校生・大学生100円（80円）／中学生・小学生50円（30円）
（　）内は10名以上の団体料金

◆行事案内　2003.8-9

北海道博物館紀行①
9/27(土) 木のおもちゃワールド館ちゃちゃワールド

講　座
8/30(土) 発掘調査現地説明会

博物館クラブ
8/ 2(土) 子どもルアーキャスティングコンテスト
8/16(土) 太鼓をつくってみよう
8/24(日) 発掘体験

◆寄贈資料　2003.4-6

○岩手県の川村隆造氏より北海道アイヌの盆3点が寄贈されました。

◆寄贈図書　2003.4-6

○山田吉彦2003『天気で読む日本地図-各地に伝わる風・雲・雨の言い伝え-』PHP新書
○解放出版社2003『人権でめぐる博物館ガイド』部落解放no.517(増刊号)解放出版社
○金の星社2003『事前に調べる修学旅行パーフェクトガイド-北海道・北東北』金の星社
○新津雅孝2003『本別紀行-夢と浪漫の本別百景』本別印刷株式会社
○佐々木史郎2003『ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究-民族誌記述と社会モデル構築のための方法論的・比較論的考察-』国立民族学博物館
○キムスポ刊行会2003『自筆　葛野辰次郎ノート』キムスポ刊行会
○宇田川洋2003『住居形態と集落構造から見たオホーツク文化の考古学的研究-』平成11年度～平成14年度科学研究費補助金基礎研究（B-2）研究成果報告書
○山と渓谷社2003『北海道』山と渓谷社
○菊池勇夫2003『近世北奥地域の馬産・害獣・大豆生産にみる人間と自然の関係史』 2000年度～2002年度科学研究費補助金基盤研究（c）（2）研究成果報告書
○津田命子2003
『アイヌの組紐-アイヌ民具にみられる組紐の組成と種類について-』（財）アイヌ文化振興・研究推進機構研究助成事業報告書
『アイヌの衣服文化を探る』(財)アイヌ文化振興・研究推進機構研究・出版助成事業報告書
○フレーベル社2003『まるごと発見博物館-探検・体験・博物館-』フレーベル社

◆行事案内　2003.4-7

季節の催し	5/5(月・祝)	子ども映写室
講習会	6/6(金)、6/7(土)	とんぼ玉づくり
博物館クラブ	7/12(土)	土器をつくろう①

◆みんぞく　こうこ　はくぶつかん in 北海道

このコーナーでは、当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

4/19(土)　元北海道大学教授でアイヌ言語学が専門の知里真志保博士（1909-1961年）の業績をまとめた書誌が有志によって刊行/AS
4/27(日)　音威子府村は、アイヌの彫刻家・故砂澤ビッキ氏がアトリエ兼住宅として使用していた筬島小学校を記念館「エコミュージアムおさしまセンター」に改修/D
5/11(日)　道立アイヌ民族文化研究センターが、アイヌ語の録音テープや写真など研究用に収集してきた資料２万数千点について、段階的な一般公開を開始/D
5/18(日)　アイヌ風俗画の先駆者で、江戸時代中期に活躍した絵師・小玉貞良の直筆による「アイヌ風俗絵巻」が、滝川市の國學院短期大学「金田一文庫」に保管されていることが判明/D
6/19(木)　旭川市教育委員会はアイヌ文化の伝承や民族の社会参加推進に向けて市の基本方針を明らかにした「旭川市アイヌ文化振興基本計画」を策定/D
6/25(水)　化石を使って町おこしに取り組む中川町と熊本県御所浦町が共同で企画展「南と北の白亜紀物語」を開催/AS
6/29(日)　初山別村で発見された化石が、約1100万年前のジュゴンの仲間と判明/AS

※AS:朝日新聞　D:北海道新聞

北方民族博物館だより
ー50号ー
2003年7月31日
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042　網走市字潮見309-1
（天都山・道立オホーツク公園内）
TEL　0152-45-3888　FAX　0152-45-3889
e-mail : hoppohm@ohotuku26.or.jp
ホームページ http : // www. ohotuku26. or. jp / hoppohm/